こまざわ経済通信

発　行
駒澤大学経済学部
同　窓　会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1－23－1

ホームカミングデー
商経学部・経済学部の卒業生集う

昨年１１月６日（土）ホームカミングデーが開催され、卒業１０年目、２０年目、３０年以上にあたる卒業生（商経学部・経済学部1,９５６名）が招待されました。招待者だけでなく多くの卒業生やご家族が大学を訪れ、秋の一日を楽しみました。

当日はオータムフェスティバル（旧大学祭）も同時に開催され、キャンパスは学生の熱気と卒業生の歓談の輪によって、終日にぎやかで華やいだ雰囲気につつまれました。

経済学部同窓会の受付では、同窓会報「こまざわ経済通信」や経済学部の研究誌『経済学論集』を配布し、経済学部の歴史と現在をご理解いただくための広報活動をおこないました。また、好評の「経済学部創立６０周年記念ＤＶＤ」も販売され、多数お買い上げいただきました。

懇親パーティ会場には「商経学部・経済学部卒業生の集い」の場を設けましたが、そこでは懐かしい同級生との再会風景があちこちで見られました。

次回のホームカミングデーは平成２３年１１月５日（土）に予定されています。第６回経済学部同窓会総会も同時に開催されますので是非ご参加ください。懐かしい母校にお出かけいただき、同窓生と旧交を温めようではありませんか。

名誉教授シリーズ

今日この頃

駒澤大学名誉教授　石井　脩二

駒澤大学経済学部を１９９９年３月に退職してから早いもので１０年以上が過ぎていることにこの原稿を書きながら気づいた。退職後ビジネススクールに転じて社会人教育にたずさわったり、会社役員として実務に従事したりと、いろいろな組織での経験を一通り通過した。いろいろな出会いもあったが、今にして思うと駒澤大学経済学部で過ごしたなかで出会ったゼミ生たちとの絆が最も長く続いているようだ。ゼミ生の何人かの人とは現在も交流が続いている。しかし、会社勤めに従事したころから毎日が忙しく、卒業後のゼミ生の成長を垣間見ることが出来なくなったことが悔やまれるところである。

会社で実際に実務に従事するという経験は自分の専門である経営学と実践との距離を確認するのにそれなりに役立ったが、同時に改めて経営学とは、学問とは、という疑問も一段と深まってしまった。そろそろひき時だと感じ、実務界からは退くことにした。このまま社会からも引退してもいいのではないかと考え、田舎に引きこもる決心をした。毎日の雑用から解放されるということは、それなりに楽しく、自分が本当に怠惰な人間であることを再認識したものである。

そうこうしている間に幸か不幸か大学院の講議と研究指導をやってみないかというお誘いを受けて、もう一度自分が経験したことを伝えてみようかと思い始め、引き受けることにした。今は、週に２回、講議と研究指導に出かけ、月１度の大学院委員会に顔を出すというなんとも贅沢な教員生活を送らせていただいている。それにつけても、駒澤大学で過ごさせていただいた２５年間の経験がいかに貴重なものであったかをいま改めて思い返しながらかみしめている次第である。在職中のかつての同僚・学生の皆さんにお礼を申し上げる次第である。

心に残る教授たち

駒澤大学名誉教授　古庄　　正

学習院高等科の時乃木大将の柩を担いだ森荘三郎先生（初代学部長）を初めとして心に残る先生方は少なくないが、ここでは大学改革を主導された吉沢文雄先生と永田正臣先生について、若干書いてみたいと思う。

駒澤大学では、教学問題を含めてあらゆることが、曹洞宗宗務庁により任命された大学当局（総長・理事長・学監・教務部長・学生部長等）によって決定されていた。吉沢文雄先生は、駒澤大学のこうした非民主的な機構を厳しく批判し、その改革を主張された数少ない教員の一人であった。先生は待遇改善の問題にも尽力された。駒澤大学の賃金は都内最低といわれるほど低かった。ある日先生は、意を決して実力者藤田俊訓学監（後に副学長）を訪ね、賃金の値上げをお願いした。しかし、学監の回答は「金に困るのなら奥さんに下宿屋でもさせたらどうか」というすげないものだった。１９６５年３月、旧経理部二階（現本部棟）で駒澤大学初の給与問題をめぐる教員集会が開かれたが、先生は永田正臣先生や富倉徳次郎先生（文学部）とともに、その発起人になられた。先生は人一倍学生を可愛がられた。卒業判定の教授会で留年者が出ると、何らかの便法を講じてこれらの学生を救うべきだと主張し大方の意向と対立したが、先生は自らの主張をなかなか曲げなかった。ご専門は経済理論の研究で、晩学ながら刻苦研磨して『賃労働の経済学』（時潮社、１９７５年）等多くの労作を残された。

吉沢先生を支援したのは永田正臣先生であった。先生は学生や教職員から慕われ、当局の信頼も厚かった。相手の言い分に謙虚に耳を傾け、主張すべきことはきちんと主張する、頼りがいのあるお人柄のためであろう。戦後結核を患い片肺を失った先生は、無理のきかないお体になっていた。にもかかわらず、大学と経済学部の置かれた状況は、学科主任、学部長、大学院委員長、それに図書館長と、たて続けに激務を先生に押しつけることになった。ご専門はイギリス経済史であったが、新聞社の客員論説委員をされていた関係から日本経済についても造詣が深く、学位論文は『明治期経済団体の研究』（早稲田大学）であった。先生は経済史のほかに近代経済学も担当されていたが、先生のご講義は経済史もケインズもすこぶる評判がよかった。正義感の固まりのような吉沢先生と全学から慕われ信頼された永田先生の組み合わせなしには、大学改革は成功しなかったろう。経済学部教授会が両先生に特例として学部長を２期お願いしたのはやはり的外れではなかった。

ゼミ紹介

瀬戸岡ゼミ

今年も、ゼミ生は大いに活動しました。２年生は、世界経済と日本経済について、それぞれ英文のテキストを使いながら討論してきました。３年生は、グローバル金融を中心に現代世界の特徴を検討してきました。４年生は、各自の卒業論文の相互検討をとおして、幅広い教養を身につけてきました。４年生の就職活動も、特殊なケースをのぞくと、ほぼ全員が内定をとり、その経験は３年生にたいする就職支援活動に活かされています（ＯＢや他大学教員ともに、学期中に学内でおこなう合宿相当の集中ゼミ活動）。日本学生経済ゼミナールの関東大会（インナー大会）、全国大会（インター大会）参加については、もちろん今年も、日本最多の参加人数と発表件数でのぞみました。学内でのイベントでも頑張りました。ゼミ対抗のバスケットボールの試合では準優勝、フットサルとソフトボールについては優勝、とくにソフトボールについては四連覇を達成。ゼミ対抗の株式投資ゲームでも優勝しました。わがゼミへの参加希望者も例年どおり非常に多く、今年も応募者の半分以上にお断りしましたが、それでも１年生と２年生あわせて、ちょうど５０人が新規に参加することになりました。

私（瀬戸岡）については、５月下旬から６月初旬にかけて開催された世界政治経済学会に参加し研究発表するためにシャンハイにいってきたほか、夏にも中国内陸の農牧地帯を現地の大学教員の案内で視察し、通算2回中国にいってきました。秋には、国内の学会でも研究発表をしました。また今年は前半期に、駒大の公開講座「混迷を深める現代世界を読み解く」を担当。あまりに熱心な受講者の圧倒的な要望にお応えして無料の「番外編」まで開講するほど盛況でした。後半期には、川崎市の市民アカデミーの講座を担当。ここでも同アカデミー最大規模の参加者を得て講座が続いています。

特筆すべきは、「現代史ゼミ」と「クラシック音楽ミニ講座」。いずれも、もともと大学院生に幅広い教養を持ってもらうために始めたものですが、その後他大学の大学院生に、さらには勉強熱心な一般社会人にも門戸を開放したところ、しだいに盛会になって、今では、多いときにはそれぞれ３０人、５０人を超える人が参加するようになりました。関心をお持ちの方、参加ご希望の方は、ゼミのホームページをご覧ください。

今年もゼミＯＢ・ＯＧ会には、遠くは仙台や岡山からの参加者をふくむ多数の出席があり、現役のゼミ生との交流がおこなわれました。その様子は、写真のとおりです。

松本ゼミ

松本ゼミは設立四年目です。現在は２・３・４年生あわせて計四十三名の学生が在籍しています。

松本ゼミは非営利組織や社会的企業の経営学について勉強しています。座学による勉強はもちろんのこと、特にフィールドワークに重点をおいて勉強に励んでいます。フィールドワークでは、実際にＮＰＯ団体や企業に訪問することにより、教室では学べないことを肌で感じて学ぶことができます。訪問調査はいくつかのグループに分かれ、グループごとに研究テーマを決め、年に２回のゼミ内プレゼン大会において成果を報告します。ゼミ内プレゼン大会では、二年生から四年生までが集まり、意見交換を行います。先輩からの厳しい意見はもちろんのこと、後輩が先輩に意見を言うこともあり、全員で切磋琢磨しています。

また学外の活動も盛んで、認定ＮＰＯ法人イーパーツとのＰＣセキュリティに関する協働、用賀商店街振興組合・用賀まちづくり株式会社との商店街活性化に関する協働、地域貢献ヨガ教室の実施（駒沢大学でヨガ、四月から継続的に開講予定、同窓会のみなさんもご参加ください！）、合同ゼミプレゼン大会に参加、立命館大学・関西学院大学とのゼミ交流、子連れおでかけマップの作成などの活動をしています。

松本ゼミの最大の特徴は、勉強とその他の部分のメリハリがしっかりしているところです。ゼミ内プレゼン大会や訪問調査など勉強するときは全員が集中します。勉強が終わればくだらない話をしたり打ち上げを行ったりと楽しい時間を全員で共有しています。特に合宿では、夏にはトヨタの工場見学・ＮＰＯ見学や花火を、冬にはスキー・スノーボードなどを行います。夜には懇親会もありとても楽しい時間を過ごしています。このように勉強に遊びに全力投球なので、松本ゼミは大学生活をとても充実したものにするゼミだと思います。

現代応用経済学科二年　渡部翔

卒業生シリーズ

細谷講師の思い出「求むるこころなき人は強し」と「青春の詩」

昭和４５年３月　経済学部　商経学科卒業　　相　原　　栄　治

私は昭和４１年に商経学科に入学、同学科は夜間で、他校では第２部と言い、学食３０円のうどんに卵５円を入れるのに躊躇する時代でした。

当時の勤務は隔勤で、朝、勤務が終わり、家に帰り、夕方1日おきに学校に通いました。早めに着く時は駒沢公園の黒御影のベンチに横になることがあり、石のポカポカが眠気を誘い、目が覚めると夜空の星が綺麗なことが思い出されます。

２、３年生の時、細谷隆介講師の「経営学」を受講しましたが、細谷先生は会社の現役の重役で人・物・金を統括する役職におられ、毎回講義は、今の経済状況や市況等、推敲の入った手書きの原稿で新しい生きた経済を学ぶことが出来ました。

先生は「求むるこころなき人は強し」という言葉を折に触れて言われ、「価値、評価は人が決めるもので、自分が良いと思っても人はそうは見ないものです。今を一生懸命努力していれば、認めてくれる人は必ずいる。目標をしっかり持って仕事をすれば、報われます。」と言われた。

また、先生はサミュエル・ウルマン（先生はトインビーと言っておられた）の「青春の詩」を引用され、年齢幅がある私たちに「いつまでも若くいるためにはいろいろな事に興味をもって当たれ。自分も矢吹教授から声を掛けられ、若い人の事で引き受けたので７０歳を挟んで７年の間、教壇に立てた」と話をされた。

授業の教科書は先生が買ってこられ、本は沢山読んだほうが良いと言われ、神田古本街で買った参考書でレポートを提出した時、資料が古いと新しい参考書を買って戴いた。

先生の講義を受講した学生有志は「駒澤細谷会」と名づけた会をつくり、卒業しても先生の話を楽しみにし、亡くなられた後もご子息、お孫さんと４０余年続いて、毎年、先生の命日近く、桜の青山霊園に墓参に行き、「求むるこころなき人は強し」「青春の詩」で旧交を温めている。

（注）細谷隆介先生は、明治３２年生まれ、大正１２年東京商科大学（現一橋大学）卒業後、東京山手急行電鉄（現小田急電鉄）に入社、専務取締役、常任顧問を務められました。また関連会社１０数社の経営に参画し、経済同友会幹事等も歴任されました。昭和４２年駒澤大学経済学部非常勤講師、昭和４６年経営学部講師に就任し、昭和４９年３月退職。著書は『企業金融政策』等多数があります。（編集部）

駒沢細谷会　先生を偲ぶ　青山墓地にて　2010年４月３日

相原栄治氏（商経学部45年卒）提供

駒澤大学経済学部松本ゼミが「平成22年度大学・地域の協働による学生まちづくりプレゼンテーション大会」にて優秀賞を受賞

松本ゼミは、東京商工会議所主催の「平成２２年度　大学・地域の協働による学生まちづくりプレゼンテーション大会」に出場しました。第５回目となる本大会の対象地域は駒澤大学も所在する世田谷区でした。都内の大学・大学院から全１７チームが参加しました。

松本ゼミの作成した地域活性化案のコンセプトは、「いつでもだれでもいきたくなるまち世田谷」でした。世田谷区には潜在的な地域資源が数多く存在しており、それらの有効活用を提案することによって、世田谷と聞くと行ってみたいと多くの人に思ってもらえるような、観光の視点を導入した活性化案を作成しました。観光と聞くと、一般的には人々が遠隔地を観光するといったイメージ持つかもしれませんが、松本ゼミは住民にも観光してもらいたいと考えて、住民を巻き込んだ観光および地域活性化案を報告しました。

この大会に向けての活動には夏休みを含めた約５カ月間を要しました。この活動期間中、改めて気づかされたことが大きく２つ有ります。1つ目は、世田谷区というまちの実態は“人”であるということです。活性化案の作成に向けて、商店街や区民まつりにて数百名の方にアンケート調査を実施したのですが、差し入れをしてくださった方、調査を手伝ってくださる方、孫が実は駒大なのだと嬉しそうに話して下さる方など、本当に多くの方々と触れ合いました。その中で世田谷区のまちの実態が人であり、本当はとても身近なものなのだと気づかされました。２つ目は、みんなで協力することのできる活動はやはり楽しいということです。松本ゼミチームだったからこそ、この活性化案を創り出せたのだと思いますし、そこには言葉では言い表すことのできない感動があります。１人での研究から学ぶこともちろんありますが、やはり仲間と切磋琢磨し合い1つの物事をやりとげられたことは、一生忘れることのできない想い出となりました。

この活動中、大会に出場しているということを忘れるくらいに、純粋に人との触れ合いに感動し、仲間との活動を楽しみ、活性化案の作成に没頭していました。そんな活動が功を奏したのか、優秀賞という成績を収めることができました。私たちの活動を、世田谷区にある一駒澤大学生として胸を張って報告できることを誇りに思います。

松本ゼミチームリーダー　経済学部現代応用経済学科３年　田　中　　夢

退職者

追いかけて駒澤

経済学部教授　福　原　好　喜

経済学史の時間のことであった。黒板わきのドアから、２人の学生がソッと抜け出した。「待ちたまえ」板書していた私は言った。教室を出た学生は脱兎の如く８号館の階段を駆け上がって行った。私は助手にテキストを読んでおくように指示して２人を追いかけ始めた。「マテーッ」私の声を聞いて職員が１人り追いかけ始めた。禅研究館まで１００米、正門まで２００米。「守衛さん、その学生を止めろ」学生は守衛２人を突き飛ばして駒沢公園通りに出た。職員は息が上がって脱落した。学生との距離は次第に離れてゆく。「まずい。逃げられるかな？」悪い予感が頭をよぎった。「駅まで凡そ１０００米か。ヨシ改札口までには捕まえてやる！」駅伝の感覚が蘇って来た。私はマイペースで２人の頭を見失わないように追った。２４６に出会ったところで２人はダウンした。１人は執拗な追跡者の顔を見て呆れ顔で笑った。職員が追いついてきて聞いた。「先生、ドロボーですか？」「いや、私はドロボーとは言ってない。」

教室に帰って、２人を黒板わきに立たせておいた。１人が口をおさえて私のところへ来た。「先生、気持が悪いです。」「医務室へ行って来い。」明らかにオーバーペースの症状であった。１人が医務室から帰ったところで２人を席に戻した。

グラウンドから逃げ出す選手に野球の訓練は出来ない。それは教室とて同じこと。大田元監督と酒を飲んだ時、「実は先週、教室から逃げ出した学生を追いかけて捕まえたんですよ。」と話した。彼は言った。「それは先生、良いことをしました。彼らは駒澤のことは全部忘れても、先生のことは一生忘れませんよ。」

３８年間教壇に立っていて思う。頭はともかく、学生の体力は確実に落ちている。

（福原好喜先生は経済学史担当、昭和４８年就任、勤続３８年）

退職に当たって

経済学部教授　安　元　　稔

昭和６２年に大阪のキリスト教系大学からこちらに移ってきた当初は、受験生の数がピークを迎えつつありました。帰宅する受験生で正門が埋まり、監督を終えてもしばらくの間は大学の外に出ることができませんでした。駒沢公園の入り口に警察の車両が数台待機し、警戒に当たるという状況が暫く続きました。１年だけだったと思いますが、私立大学の経済学部の中で、駒澤大学が最高の競争率を誇ったことがありました。確かに、偏差値が上がり、競争が激しくなれば、優秀な学生が多く集まるという傾向はあります。昨今のように、大学全入時代と言われるほど入試が難関ではなくなり、学力の低下が著しいという事実は日本の教育の一つの危機であるとも言えます。

教員にとって唯一の慰めは、たとえ偏差値が下がっても優秀な学生が必ず何割かはいるということです。ただ、その比率の低下が著しいということは紛れもない事実です。入学試験における競争率の低下のほかに、情報化社会、活字文化の退潮と行き過ぎた映像文化、匿名性をはじめとする現代文明の負の側面が学生の学力と気構えの低下を余儀なくさせています。こうした構造的な問題の解決は、容易ではありません。しかし、教育に携わる者すべてにとって、現在、大学に限らず教育制度全般の抜本的な改革が緊急の課題となっていることは間違いありません。監督官庁や経済界の思惑通りに教育の理念を曲げることが望ましくないことは言うまでもありません。大学の教員・職員の間から、あるべき大学像を構築する機運が高まることを望んでやみません。

２４年間の在職中に２回も在外研究の機会を与えられたことは、望外の幸せでした。充実した有意義な研究生活をイギリスで送ることができたことは、何にもまして、ありがたいことでした。やり残した課題の完成に向けて、これからも一層精進したいと思います。長い間ありがとうございました。

（安元　稔先生は経済史担当、昭和６２年就任、勤続２４年）

公認会計士試験に経済学部関係者が６名合格

平成２２年の公認会計士試験で、本学関係者１０名が見事合格を果たしました。うち、６名が経済学部関係者で、経営学部関係者および法学部関係者がそれぞれ２名ずつという内訳です。前回の平成２１年公認会計士試験では、本学関係の合格者５名のうち３名が経済学部関係者（うち１名は現役合格）、平成２０年の試験では本学関係の合格者１２名のうち８名が経済学部関係者（うち２名は現役合格）、平成１９年は本学関係の合格者９名のうち６名が経済学部関係者でした。公認会計士の分野において、本学の中でも特に経済学部が、そのリード役を果たし、実績を重ねてきています。

また、今回の本学関係の合格者１０名のうち、２名が現役合格で、経済学部と経営学部の４年生でした。経済学部の４年生で今回合格した門倉翔太君は会計プロフェッショナルクラスの履修生です。経済学部の卒業生の合格者は、平成１８年、１９年（３名）、２１年に卒業された方々です。現役生の頑張りはもちろんのこと、卒業された後も難関国家試験の突破を目指しておられるＯＢの皆さんの存在を大変頼もしく思っています。

さらに、今回の合格が大変価値あるものと考えられる理由は、その合格率の低さにあります。公認会計士試験の合格率は、手元に資料がある平成７年からみますと、平成７年は６．９％、その後は６％台、７％台、８％台と推移し、平成１８年が８．４％であったのが平成１９年は１４．８％、平成２０年には１５．３％まで伸びました。この背景には、わが国の公認会計士の数を増やそうとする金融庁の政策があったわけですが、逆に監査法人への就職難という事態が生じたことをうけ、平成２１年は９．４％、今回の平成２２年は７．６％と落ち込みました。この７．６％という数値は、平成１２年の合格率と同じです。こうした大変厳しい状況の中での合格ですから、まさに賞賛に値するものといえるでしょう。

一方、今回の税理士試験ですが、こちらも快挙です。会計プロフェッショナルクラス履修生のみのデータですが、４年生の亀山奈津季さんが簿記論と財務諸表論の２科目に合格、３年生の長沼歩さんも同じく簿記論と財務諸表論の２科目に合格、３年生の神頭秀樹君が簿記論に合格しました。税理士試験も極めて難易度が商い試験ですから、現役合格は実に素晴らしいことです。日々の地道な努力の成果が見事に現れていると思います。今回は合格には至らなかったものの日々頑張っておられるＯＢ諸氏および現役学生にも次回の合格をお祈りし、心よりエールを送りたいと思います。

（経済学部教授　森田佳宏）

ソフトボール大会2010

今年も１０月１５日の開校記念日に経済学部同窓会後援のセミ対抗ソフトボール大会が行われました。前日、当日の朝方まで雨が降り、こちらも例年通りの開催が危ぶまれる天気になりましたが、開会式の３０分前にはすでに準備や練習に打ち込む学生の姿も見え、その姿を見たからか、大会中は雨も降らず順調に行う事が出来ました。肝心なトーナメントの方は前評判の良かったチームが早々と敗退する予想外の展開が繰り広げられました。試合内容もどこも接戦で見ごたえのあるものばかりでした。そして結果は幾多の番狂わせが起きる中、やはり優勝候補筆頭の瀬戸岡ゼミが連覇を成し遂げました。また、準優勝は大石ゼミ、３位は清水ゼミと石川祐二ゼミ、敢闘賞は岩波ゼミでした。最後になりましたが、今大会の運営に携わり一緒になって大会を盛り上げてくださった先生方をはじめ学生の方々に心から感謝致します。

駒澤大学経済学部経済学科３年　西川　瑞紀

訃報　佐藤　俊明先生の御逝去を悼む

駒澤大学名誉教授佐藤俊明先生が９月２５日に逝去されました。享年８０歳

先生は経済学部の前身である商経学部を卒業され（第２期卒業生）、中央大学大学院を修了後、昭和３９年に開設された駒澤大学北海道教養部に着任され、その閉校まで３５年に渡り教壇に立たれました。

その間、丁寧で厳格な講義で多くの優れた学生を育てられたばかりでなく、北海道教養部長、駒澤大学附属岩見沢高等学校長を歴任され、学校行政にも活躍されました。まさに駒澤大学とともに歩まれた生涯であり、経済学部の歴史を語ることのできる重鎮であり、大先達の１人でした。

ここに哀悼の意を表し、先生のご冥福をお祈り致します。

（草創期の商経学部について先生は「こまざわ経済通信」第２４号に御寄稿になりました）

（経済学部教授　友松憲彦）

経済学部同窓会事務局からのお知らせ

（1）経済学部創立60周年記念DVDができました

経済学部の歴史と現在の学内風景、入学式、卒業式、ゼミナール連合の活動、オータムフェスティバル等の学内行事、資料を収録したＤＶＤが完成しました。

ご希望の方は氏名、卒業年度、卒業学科、住所、電話番号を記入し，料金１０００円（送料込）を下記の郵便振替口座にお振り込みください。

＜加入者名＞　駒澤大学経済学部同窓会

＜口座番号＞　００１９０－１－６１４８０９

（2）会員の増加にご協力を

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたら入会をお勧めください。

入会手続きは氏名、卒業年度、卒業学科、住所、電話番号を記入のうえ、上記の口座に同窓会費を納入することで完了します。

・会費：年会費２０００円×３年分＝６０００円（会費は３年分を一括納入します）

（3）「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実をはかるため卒業生の原稿を募集しております。積極的なご投稿をお願い致します。

・論題：自由

・字数：８００字以内

・送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局

＊なお、原稿の採否は編集委員会にご一任ください。

（4）ホームページについて

「駒澤大学経済学部」のホームページ（http:www.komazawa-u.ac.jp/gakubu/keizai/）から「経済学部同窓会」のホームページに入ることができます。

（5）第6回経済学部同窓会総会のご案内

平成２３年１１月５日（土）に開催されますのでご参集ください。

〈新入会員紹介〉

横山　脩（２１年度卒）、松田　徹、木村健史、田中晶子、鹿浜晧市（以上２２年度卒）

経済学部同窓会事務局　〒１５４－８５２５　東京都世田谷区駒沢１－２３－１